

**オンライン講義による看護学生に対するE B P教育が
及ぼす影響についての研究**

学習・研究成果報告書

看護医療学部4年 島田宗太郎

背景：

エビデンスに基づく実践(Evidence-Based Practice:EBP)とは、「研究と患者の記録から得られた最良のエビデンスを臨床的な専門知識と患者の希望と価値観を統合して行う医療提供における問題解決型アプローチ」(Melnyk et al,2009)と定義される。

Patelarou らが実施した,看護学生に対する EBP 教育に関するスコوپングレビューによると,EBP 教育を看護学の学士課程に組み込むことで臨床アウトカムの向上が望めると結論付けられている(Patelarou et al,2020).本研究では,この知見を参考に,日本の看護学生に対して EBP の教育プログラムを実施することで,学生の EBP の実施頻度,態度,適応やエビデンスの検索などにどのような影響があるかを量的・質的に明らかにすることを目的とした。

方法：

研究参加者は神奈川県に位置するある大学に在籍し看護学を専攻している3年次と4年次の学生のなかで,①EBPに興味がある②オンラインでの講義に参加できる③研究の参加に同意が得られるの三点を満たす11名であった.参加者にはEBPの自己評価尺度である「Student Evidence-Based Practice Questionnaire(S-EBPQ;21問)」(Upton D et al.2016)を主とする質問表をプログラム前後にGoogle Forms上で回答してもらった.S-EBPQは,①EBPの実践の頻度(6問),②態度(3問),③エビデンスの検索/評価(7問),④EBPの共有・適応(5問)の4つのサブスケールにより構成され,それぞれ合計得点が高いほどEBPに対する態度などが良好であることを示す尺度である.S-EBPQは指導教員の研究者が翻訳中のものであったが,その研究者の許可を得て使用した。

質問紙調査の分析では,各質問とS-EBPQ合計得点とサブスケールの得点を算出し,プログラム前後の差について対応のあるt検定を行った.この際,効果量(Cohen's d)の算出も実施し教育プログラムにどれだけ効果があったかについても検討を行った.統計解析にはSPSSを用いた。

次にプログラム終了後に8名を対象にフォーカスグループインタビューを実施した.インタビューはオンライン(Zoom)による半構造化面接で行い,教育プログラム受講後のEBPに対する考え方や知識の変化,S-EBPQの質問項目に含まれているEBPの専門用語に対する理解度を具体的に尋ねた.インタビュー内容は録画し,逐語録を作成した.逐語録を質的内容分析にて分析した。

結果・考察：

本研究で行ったEBP教育プログラムを通して参加者のS-EBPQの全体スコアの平均が10.1点上昇し,効果量(0.51)から判断し中程度の効果が示唆された.サブスケールの解析では"態度"を除く全てのサブスケールで平均点の上昇がみられ,効果量から小程度~中程度の効果があることが示唆された.特に介入前後で"エビデンスの検索/評価"のサブスケールの得点では有意な差が見られ,効果量も0.59とサブスケールの中でもっとも大きかった。

また,質的内容分析では,参加者の自覚した効果としてEBPの理解の向上,論文に関する知

識,理解の向上やプログラムの内容や提供方法の改善点などについての発言が見られ今後のEBP教育プログラムの改善において有用な情報を聞くことが出来た。

オンラインによる教育プログラムの実行可能性について,本研究からオンラインによるEBP教育が実現可能であることが示唆された。しかし,EBPの教育的介入に関するスコopingレビューによればオンラインによる介入よりも対面での介入の方がより効果的である可能性が示唆されている(Patelarou et al,2020)。また,“コロナ禍対応のオンライン講義に関する学生意識調査”(松原他,2020)においてもオンライン講義は従来の対面型講義と比較し,講義に集中できない,他の受講生とのディスカッションや交流が少ない,教員に質問しにくいといった意見も見られている。本研究のインタビューにおいてもプログラムに登場する用語の説明が不足していたといった発言が見られており,今後,対照群として,対面での実施ないし一部オンライン教育を用いるブレンデッドラーニング(Blended Learning)などを設定して研究を行うことで,より効果的な教育的介入の手法についての検討が可能になると考えられる。

結論：

看護学生を対象としたEBP教育プログラムを実行することで看護学生のEBPの実践への意欲,知識,能力を増大させる可能性が示唆された。今後は,対照群の設定や対象施設の拡大を行うなどより妥当性の高い研究デザインで効果を検証することが望まれる。

*本報告書は看護医療学部 プロジェクトⅠ・Ⅱの成果物として提出した論文「看護学生を対象としたEvidence Based Practice 教育プログラムの実行可能性の検討」を抜粋・要約・修正したものである

文献：

- 1)Melnyk, B. M. , Fineout-Overholt, E. , Stillwell, S. B. et al.(2009): Evidence-Based Practice: Step by Step: Igniting a Spirit of Inquiry, American Journal of Nursing, 109(11), 49-52.
- 2)Patelarou, A. E. , Mechili, E. A. , Martinez, M. R. et al.(2020): Educational Interventions for Teaching Evidence-Based Practice to Undergraduate Nursing Students: A Scoping Review, International Journal of Environmental Research and Public Health, 17,6351.
- 3) Upton, P. , Evans, L. S. , Upton,D. (2016) : Development of the Student Evidence-based Practice Questionnaire (S-EBPQ), Nurse Education Today, Volume37,38-44.
- 4) 東洋大学：松原聡,木滉一郎, 安達由洋 他:大学現代社会総合研究所 ICT 教育研究プロジェクト「コロナ禍対応のオンライン講義に関する学生意識調査」, Retrieved from:<https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/gensha/research/52395/>(検索日：2021年2月3日).